

會



報

昭和 18 年 1.2 月

121

日本山岳會

白山々系とアイヌ語

磯野 三郎

白山の裏側飛驒の白川郷御母衣部落へ行くとこのクミボロクの地名の起りに就て古老は次の様な話をしてくれるのである。

昔白山の開基泰澄は白山を開かんと思ひこの地に來り修業を積んでゐた。

處が泰澄の母は子供戀しさの余り遙々故郷なる越前の國今の福井縣足羽郡麻生津村三十八社より只獨り九頭龍の川を遡り油坂の峠蛭ヶ野の高原を越して此の山奥へ、いとし我が子の顔を見にやつて來た。處が泰澄白山登頂の爲山中深く修業をしてゐたので何時迄待つても逢ふ事が出来ない、余りの戀しさに庵に置いてあつた泰澄が衣を抱いて持ち歸れりと、故に御母衣の名ありと言ひ聞かせるのである。

斯様に泰澄は遂に修業を積み白山を飛驒の此の地より登頂せりと云ふのである、然るに母衣なる地名は各國各地の城下町に見る地名にして私達の住みし金澤市内にも母衣町なる町名あるもこれは即ち母衣衆の住まひせる地名であり、又は母衣を作り居りたるに依り地名となる場合もある。

然るにかゝる飛驒の山中に母衣衆を駐屯せしめた大名が在つた事もなく又母衣の製作を専業にしてゐた時代もないのである。

これは全く御母衣とは當字に相違なく私に言はせればアイヌ語であると思ふ。

即ちクメボロクであらう。

メは寒い涼しいの意である。ボロは札幌のボロであつて廣い干いた土地の意である。

御母衣部落の地形的位置は丁度メボロに相當する土地で耕地に適するボロを有してゐる。されば平家の殘黨は後世このメボロに世を遁れた大家施制度を以て名なる白川郷を作り安住の地としたのであつた。

× ×

それでは白川筋から加賀方面にかけて今四、五その例を探ねて見やう。

御母衣より白川街道を庄川の流れに沿ふて萩町へ行く、同部落の東方に天生峠、ソーレ山等がある（陸地測量部五萬ノ一圖白川村参照）

アモウ峠なんて一寸語源を探し難く、ソーレ山に到つては何處か

らそんな名前がついたか判斷に困る、山言葉にしても同地方にはそれに相當するものが無く古老に訊くも、不明、郡誌其の他の既刊のものに就いて見ても言及してない。以後私の説アイヌ語に依り検討してみやう。

天生峠（アモウ）アモウはアイヌ語にて安息の意にして一と休みする處、峠なのである。

ソーレ山ソーレとは瀑布を言ふ。リ又はレとは高いの意にして後進民族もやはり見事な立派な高い瀧だと感嘆して名付けたク高瀧クなる瀧が山中深く懸つてゐる、又レは助辭なる爲ク瀧のある山クと解してもいい。

ゾーゾ山萩町を下りて飯島部落の西方にある山である。ゾは又瀧の他に「露岩」とか「まこと」とかの意があるから岩の露出してゐる所に瀧が懸つてゐる意。

赤摩木枯山（下梨五萬ノ一圖参照）摩木枯山（下梨五萬ノ一圖参照）等はどこから誰れが見ても發音を無理に當てゐる事がわかるが、この山も「アカマイ」山であつたろうと思ふ。

それが傳り誤つてか「アカマツコ」山と轉音されたものと思ふ。アとは何々がある、何々が座すの意。

カムイ とは神のことにして即ち神のある山、アイヌ語では熊は神なのである通常熊と解していい。熊の澤山ある山と言ふ意味であらう。今尙此の附近熊の巢窟である。

目次	頁
一、白山々系とアイヌ語	一
二、蓬田岳	二
三、大蛇尾、小蛇尾	三
四、淺間山と磐梯山	三
五、古書の評價	四
六、圖書紹介	四
七、會員通信——望月達夫、橋本三八、松岡實、奥野正亥	八
八、北田正三、清水龍三、高見定吉、湯淺巖、山本雄一郎	九
九、今川良雄、土田新一諸氏	九
一〇、第二回有志懇談會	九
一一、會務報告其他	九

尾添一（五萬ノ一圖白峰参照）
オーゾに非ずしてオーソである。

土地の人は白山の山の尾に添つてゐるからかゝる名ありと言ふがそれならばオーゾと發音すべきである、これも發音への當字である。

オとは澤山の意で瀧の多くある土地の意にしてこの尾瀧川は兩岸ツツと絶崖であつて瀧の連續である。

部落名は川の名オーソより附けられたものであらう。

又尾添川と白峰川との合流點より向つた處の木滑はキナペは露、リは高地即ち露茂き處の意と私は解す、その他白山々系にはアイヌ語で解決のつく山、谷、原等の名が多い。

直海谷（ノミダニ）赤堂山（アカンドウヤマ）石徹白（イトシロ）三面（サツラ）等々挙げれば澤山ある。

然し全部が全部アイヌ語だと断定を下しノホームンとしてゐるのでは無く參考に資して見るのである白山々系の白川郷や尾添附近からは過去に於て先住民族の石斧、石鋸、石庖丁等多數發見されてゐる。

これらの遺品を見るにアイヌ民族に使用されたものでシベリヤ方面に多く發見されてゐる。この點からアイヌ系統であらう

とある筋から豫想されてゐるのである。

斯様に考古學的にも又民族學的にも其の他醫學的にも先住民族にアイヌが居たと言ふ學説を、私がこゝに山の地名の研究からして尙一證を得たと嬉ぶのである。

× ×

序でに極論を述べる事を許さるならば私はこの地名の研究からしてアイヌ先住民族は我々の祖先と融和する事なく北上し去つたと言ひ度い。

それは地名と言ふものは同種民族間に於ては實に重要な役割を持つてゐる事は今更言を要しない。處がその地名が清音たるべきが濁音となつたり同音が同列の或る音となつたり、まだそんな程度は好いとして大分變轉古にもぢられてゐる處からして地名を付けたる民族と次に來た民族との間に充分なる事務引継ぎが出来なかつたものと思はれる、即ち極く一部の例外の先住者を殘して北上し去つたのであらう。

そこで我等祖先の人々は曖昧に地名を聞き傳へたのでは無からうか、と考へるのである。

最近醫學界の或る方面からの研究で（濱松健康保險所々長加藤義次郎博士の研究）内地山間各地の住民の骨骸、主に頭蓋骨の研究に

依り海拔の高い處程額が狭くなるとの面白い論であるが結論に先住民族たるアイヌは大和民族に追はれて融合する事なく段々と北邊に移住した、日本中央高地にはアイヌの血は續いてゐないと言ふのである、此處に到つては私の極論も立證してくれる或る分野があると思ふと心強く感ずるのである（昭和十八年一月）

蓬田岳

行方沼東

阿武隈山脈の中央より稍西南に當り、夏井と阿武隈の二川に狹まれた一固りの山地がある。蓬田岳を中心とする黒石山、二ツ石山、一歪山、日影山、雲水峰、東山、蝦夷ヶ岳等がそれである。蓬田岳は大瀧根より西に寄つてゐるだけに入溝、日光、那須をはじめ、飯豊、磐梯、吾妻、蔵王、安達太郎等の廣潤な山岳展望臺となつてゐる。磐越線小野新町と水郡線谷田川驛から何れも凡そ三里、石川町から東北へ五里のところにある。その周邊は所謂阿武隈の高原で群小の山々の小皺で埋まつてゐるのである。

秋の末に私は石川の町に住んでゐるY君と共に蓬田岳へ登るために、同君の家を發つた。流石に東

北の朝は寒さもきびしく石川から北須川に沿ふ街道の日影には眞白に霜が下りてゐた。母畑の村に入ると下湯の旅館が暖かく日に當つてゐるのが見える。蓬田岳に登る人は、こゝに宿つて翌日山へ往復するのによいであらう。何となく旅情をそゝられる静かな山村の湯であつた。下湯から間もなく上湯になる。上湯には川を狭んで役場や郵便局があり又發電所も見え上湯の宿へは橋を渡つて行くのである。こゝから北須川も溪流らしい姿にかはる。上湯とは別に中の湯といふ眞新らしい旅宿が道の傍にあつた。それから暫らくの間は萱山と雜木山で人の住む家も見當らなかつた。石川から凡そ二時間程歩いて須釜への道と別れ千五澤に入る。丘陵のところどころに炭甕があつて淡い煙を空にあげてゐた。畑に出て蒔蒔手を堀り取つてゐる農家の一族もある。家々の軒下には柿が吊るされてあつたり、大根が干されてあつたりまた黒っぽい甘藷が乾されてあつたりするのを見た。千五澤を出抜けると右へ西山川が分流し澤の奥に發電所が見える。小野新町圓幅の三九七M記入の地點で眞弓、小平への道が右下の方へ下つてゆく。こゝに丈けの高い指導標がしろじろと日に照されてゐた。その少し先きて

荻ノ目に行く小徑が左へ別れる。丘と丘の間に狭い水田があり左側に如何にも豊かそうな大きい農家があつた。白壁の土蔵も建つてゐた。それが煙石といふ部落であつた。少しづつ登りになる坂をゆくところとぼつりと日當りのよい場所に一軒位づゝ農家がある。右に永田への岐路があつた。一軒家の前で大根を洗つてゐる村娘に蓬田山への分れ道を訊くと店屋の角から曲つて這入るのだといふ。間もなく高原の上に出た五〇四Mの記入の邊から前方の暗褐色の蓬田岳が見え始めた。高原の道が幾らか下り氣味になり狭い山田を見乍ら下り蓬田の關根といふところに出ると村娘の話した店屋がありその少し先きて本道と別れて左に折れた。そこには稍開けた水田が擴つてゐた。前の方を大きな土手のやうに限つてゐるのはピンズル山（八四五・八M）で山の下に點々と打達（ウツチダ）の村が見える。凡そ一時間村道を辿つた。村中に鳥居が立つてゐて菅船大明神といふ額が掲げてあつたがこれは蓬田岳の里の鳥居であると思つた。

蓬田岳は全容を左の方に現して頂上近くの岩塊も手にとるやうにはつきりと見えた。打達の一帯の奥まで行くと道が二つに分れる。右の方農家の四五軒固つてゐる間

をゆけば表登山口と云ふべきよい道である。だら／＼といつか登ってきたので南に遠く三株山や芝山らしい姿が見える。

私達は程近い樺林に入り切り株に腰を下ろして休息し薄日の照る中で辨當を出して食べた。この附近は二帯に蓬田牧場といふ馬の放牧地で木柵や土手が廻つてあつたり馬の水飲み場が設けてあつたりした。それから表登山口とは別の

小徑を牧場の建物を見下す様に右へ熊笹の中を辿つて行つた。大きな澤の口もとまで行つて左側の尾根へとりつき、そこを登つて小松林に入り土手のあるところに出た土手の角からは山頂の岩が頭の上に見える。踏み跡を辿つて西側の

尾根を登り頂上の直下に出て表口からの廣い道に合つた。猶登ると立派なお宮があり傍に小屋までも建つてゐた。お宮の後ろを傳ふと九五・二の三M角點があり大きな岩がそちこちに露出してゐた。

岩の上に立てば、那須、磐梯、吾妻、藏王の諸山は眞白な雪を見せて美しく空を限つてゐた。大瀧根から羽山、矢大臣、鬼ヶ城の山々は東に近く、その山下には小野新町や多くの村々とうねつてゐる街道が廣く見渡せた。南に群山を越して芝山、三株山が、更に八溝山が長く横たはつてゐた。那須の高

原をたどれば阿武隈の長流白く、磐梯の直下には郡山の市街が、それと明かに指さされた。蓬田をとりまく周りの一盃、日影、雲水、東、等の山は何れも茶褐色の峰頭を眼の下近く起してゐる。

これらの山岳の大観はこの山の位置にして始めて得らるゝところと思はれた。暫らくは地圖を手に四方に眼を轉じ乍ら飽くことのない眺望に耽つた。

夕方近い山上は風も冷え冷えと寒かつた。岩の上にY君を立たせ撮影をすましてからお宮の前へ引返した。南へ下る廣い路は地圖の通りで尾根の上で二分し右に下れば打違へ左に下れば蓬田新田へ出られるものであつた。私達は一さに落葉を踏んで打違へと下つた

蓬田岳のお宮は毎年春にお祭りがあつて近村からの信仰登山者が非常に多いといふことである。お宮には武運長久祈願の札が澤山貼つてあつた。いつものやうに羊齒によく注意して登つたが登山路には森林といふ程のものなく多くは雑木の丈の低い林叢で羊齒の生育には不適らしくシシガシラの外には何も見ることが出来なかつた。

(五萬分ノ小野新町、須賀川、棚倉、参照)

大蛇尾・小蛇尾

沼井 鐵太郎

會報一二二號に通報以後の行て昭和十七年秋及初冬の二つ。

十月十五日の夜行、岩永信雄君と二人で出發。十六日西那須野。

關谷——幕沿、昨年連れた伊南熊吉君の家に着いて案内をわけ合つたが、村の仕事がいそがしくて無理もいへず、二人だけで大蛇尾への道を辿る。夜行不眠が祟つて能率上らず馬返しや其他で油を賣り過ぎて豫定通り行けず、大瀑から十町も進んだ積の大きな岩塊の蔭に野營。十七日未明から降り出し

何とも仕様がなないので、濡れながら二股まで往復する。二十年の昔と違つたのは益々道が悪い事で、土地の人でも殆ど無人な事がわかる。それだけに昔は岸の上を歩いた所を川通し行つて、三四十人も渡れる大きな岩窟を見たり、優麗な大蛇尾河床の水と岩の風致を楽しんでたりする事が出来た。同じ道を幕沿に向つたが日暮になつたので午後五時半最後の鞍部から湯宮に下つて行つた。其して街道から又熊さんの家に行つて泊めてもらひ、幹かし物で夜も更けた。十八日は天候恢復したが、都會に用事をひかへた二人は空しく歸らな

ればならなかつた。

次いで十一月二十一日、今度は全く單獨行、夜行は指定日乗車券の爲た稍空いてゐた。二十二日幕沿に行つて熊吉君を訪ねたが、獵期で大抵山に入つてゐるだらうと思つた主人が身體が悪いとかで家に居る。例によつて朝食をすまして一人て小蛇尾に向つた。小蛇尾下流の高巻道で萩平のも一人の山通

山田五郎翁と其の息子達にあふ。一寸山仕事に行つてゐたのだといふ。翁の話によつて、去年のやうに廣河原の岩小屋迄道を辿つて行かないので、大分手前からナベワリ澤對岸迄下りる。それから巨石轉々たる河身を一時間餘り廻つてユーズクの岩小屋、それから、黒岩といつて一枚右岸に大きな立岩になつた關門を越えて第二の門のやうな所の上のツリヌキ岩小屋に來る。此の手前で獵師に逢つた。

彼等の作つたばかりの原始的な小屋で御厄介になる。翌二十三日は一寸降つたので出發がおくれ初多の日の短かさに終に水源の山に立つ事は出来なかつたが小蛇尾本流を千四五百米迄つめて見た。上の方は新雪で時に膝迄没し熊や何かの足跡が無数にあつた。小蛇尾は一つの瀑を除いて皆安全にへつて行ける。此日も同じツリヌキで單獨野營の第二夜を送つた。二十

四日三時間ばかりで萩平に戻つて來る。熊さんの家に一寸寄つて、常コースを東京に歸つた。蛇尾谷入りの歸りは必ず關谷から省營バスに乗れる。但し紅葉時は鹽原の客てバスに乗る迄大分立ッ坊をしなければならぬ。なほ蛇尾谷の登山記録が去十一月發行の山と溪谷七六號に見出される。原全教氏「大蛇尾谷と木ノ俣川」(二七一頁)。

原氏は井汲氏と共に遅野澤の藤田利松君を案内として昭和八年(一九三〇)八月初、大蛇尾を谷通しつめて西股に野營、なほも水源を廻つて鞍部を越え木ノ俣川に下りて野營、板室に出てゐるが、この案内の利松君は熊吉君の實兄であつて、先日も小蛇に獵に入つてゐたやうだ。

淺間山と磐梯山

名須 川 渡

何日もの事ながら近來は一層仕事之急しくなつて來たので、夜汽車を利用して淺間と磐梯とを日曜日の日歸でやつて見た、

淺間山は一月三十一日追分口から獨りで登つたが天氣は素張らしく良く冷くはあつたが風もなく先づ申分のない條件だつた。親切な驛員のお蔭でストープにあてゝ貰つたがその人々の話によると南側から登る者は随分少いらしく僕も一

人の登山者にも出會さなかつたし又足跡もなく静かな落付いた山歩きが出来たのは嬉しかった。追分宿から十分も歩くと雪はずつと連續して残つてゐたが無樹地帯から上はスキーは駄目でアイゼンとなる、スキーデボは約一八〇〇米附近但し右手の澤に入れば二一〇〇米迄は使へたと思ふ。雪崩の心配は全然なく堅い所もなかつたからビッケルは敢へて必要は見なかつた。血ノ池から頂上まで三時間半かゝつたが、之は僕の體力が少し弱つてゐたせいと思ふ。降りのスキーは一向面白くなく時間の短縮以外に意味は無く、スキーを樂みに行く人はこんな山へは登らぬ方がいゝ。

二月十四日には會員の伊藤彌十郎、谷重雄兩氏と共に磐梯山へ行つて見た。一四〇〇米以上は絶えず雲がまつはり付いて頂上は姿を見せなかつたし、風も上の方は相當吹きまくつてゐた。翁島驛から頂上まで五時間十分、降りには押立温泉、鷲ノ湯に一寸立寄つた。雪は驛で二、三尺スキーデボは約一三〇〇米アイゼンは用ひたがビッケルは先づ不用だつた。雪の條件がよかつた爲か皆殆んどデングリ返る様な事はなかつたし大體スキーには好適な山だらう。

様な型の山だが乗物が割合便利で我慢さへすれば天候の如何に拘らずへと言つてもあまりひどい日は別だが、頂上迄登れる山だと思ふ。

古書の評價

藤島 敏男

北支から滿洲朝鮮を廻つて來た磯野計藏君が、熊本の寓居を訪れて、興味ある土産話を齎した。

北京滞在中のある日、白耳義人經營の、とある書店で山の古書でもあるかと鶴の目鷹の目で書棚を漁つてゐると、どこからか聞覚えのある聲が、耳に入ってくる。オヤと思つて見廻すと、向の方で店主と頻りに渡り合つてゐるのが、今は新京にある筈の松方三郎君だといふのである。いま頃、どうしてこんな所にと、お互ひに奇遇を驚き久瀾を叙したらしいのだが、御兩人いづれ劣らぬ書物狂、名所舊蹟の見物はおるか、要件を後廻しにしても古本屋へ足を向ける口だから、別に奇遇と驚くにも當るまい。松方君は新京行きの汽車待ちの時間を利用してといふ譯で、忽々に姿を消した相であるが、残された磯野君が、ゆつくり腰をおちつけて物色すると、山岳書はそれほどでないにしても、西藏、ネパール、さては中央亞細亞に關する本が中々豊富に列んでゐる。中にも

Bechtold, Nanga Parbat Adventures.	60
Burdall, Contest of Minyagonkar.	98
Conway, Climbing & Exploration in the Karakoram Himalayas.	300
David-Neel, Souvenirs d'une Parisienne au tyibet.	1925
Knowlton, The Naked Mountain.	50
Massieu, Isabelle, Nepal et Pays Himalayens.	137
Shipton, Blank on the Map.	140
Stein, Aurel, Innermost Asia.	137
Visser-Hooft, Among the Karakoram Glaciers.	8000
Wilson, The Abode of Snow, 1875	157
Youghusband, The Heart of a Continent.	125
	150

光つてゐたのが、オウレル・シタインのインナーモスト・エシア四冊、北支は物價高ときけど、一九二八年の刊行に係り古書とも稀觀書とも言へない程度のもので、一千元もするかと値踏みをしたところ、一萬元をビタ一文缺けても賣らない、結構それでも賣れてゆくとこの挨拶。J A Cの會員である以上、同君も贈は据はつてゐるに違ひないが、この返答には聊か度贈を抜かれたらしい。

中々手に入らない。本の値を上げないで、食べていかれますか」となるほど尤もな譯である。磯野君招來のリストから少し抜き書した書名と價格(單位元)をここに掲げてみる。リストは三三月前のもので、問題のインナーモスト・エシアは八千元と記され、僅かの間に二千元の値上りをみせてゐる。この調子だとまだく伸びる可能性がある。

北支の元と日本の圓とが等價であることは紛れもない事實、一萬元は則ち一萬圓である。この標準で、吾々の所蔵する山岳書や探検書を評價すると、とてもない数字となり、海外遠征費の調達などはお易い御用だ。何だか急に懐の中が温くなつたやうだと、時節柄貧弱な炭火の火桶に手をかざし乍ら磯野君と苦笑したのであつた。

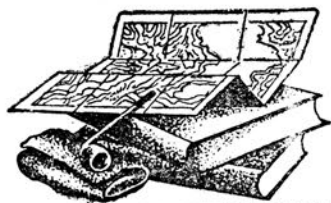
雲表を行く

島田 武時

冠松次氏の新著「雲表を行く」を見る。之はたのしい本である。

收載された寫眞の殆んど全部は冠氏の過去の數多い著者に載せられたものであり、皆一度は拜見したものであるが、かうして一冊に纏められて寫眞、隨筆集として出版されると又一種の感興が湧くのである。

しかし私一個の主観的な見方からすると随分詰らぬと思ふ寫眞とてないわけではない。以前の著書に載せられたもので載せて慾しかつた氣のするものもある。之はしかし現在の檢閲關係や、著者の好みて制限されたものとも思はれる。筆者の好みではなくとも四十年の山旅の中から拔萃された百七圓の寫眞とすればそこに冠氏の山へ寄する思想、態度をうかゞひ知るこ



介紹書圖

とが出来ると解してよいであらう
冠さんの登山には私達若輩の登山とは異なつたものがある。それはこの寫眞集が雄辯に説明して呉れる。

この寫眞集には眞冬の山の姿がない。それは私達にはいさゝか淋しいことであるがあるが私達同輩が寫眞集を出すとしてもおそらくはこの集の如く雄大な黒部の景觀は載らないであらう。そこに冬山の姿がなくとも冠氏の偉大な足跡があつてつけられるのである。それ程黒部と冠氏の關係は離れがたいのがみられる。そしてこの寫眞集もつまるところ黒部とそれを圍む山々を中心としたものであり、それに秀逸な作品の多いのも極めて當然のことであらう。

私は戦時とは云へかくの如く優れた寫眞集の出版されるこの國の力を喜び、極めて月並な賛辭でしかないが國土のこの山水をかくも優秀な寫眞によつて紹介された冠氏の勞に對して改めて敬意を表したい。

雲表を行く

冠松次郎著

昭和十七年十二月墨水書房刊

(定價二一圓五〇錢)

吉澤一郎著 北の山南の山

甲「吉澤氏の今度の本を見たか」
乙「あゝ、茨木さんの繪が表紙に

も包紙にも描いてある丸停三八の研究・隨筆・紀行だらう。昭和十七年十一月二十日初版、三省堂發行、二三九、本文四九五頁、口繪圖版二十、序文四頁、目次六頁、山岳高度表並びに登山年譜六、スケッチ四、地圖十七、紙は時節柄良くないのは止むを得ないが、内容は研究編にアラスカ、アンデス、メルセデリオ(アンデス)、マッターホルン、南方國の山々としてニューギニアとニュージランド隨想編には……」
甲「一寸待つて呉れ。其の隨想編と紀行編に所謂北の山、南の山が出てゐるのかい」
乙「いや。時局向を主とした小論や感想などの著者のいふ思索上の作品と紀行は内地に限られてゐる」

丙「ふふん。本の名は北の山・南の山・東の山・西の山とでもみんな方角をつけたらいいだらう。尤も南船北馬なんて熟語もあり、そんな名前前の誰かの紀行文集が昔出た事もあつたから、こいつは一つ「北の山・南の山」といふ吉澤式個性たつぷりな新語を作るかな」
甲「おいおいよせよ、悪口は。」
丙「いや言ふよ、も一つ。悪口のつもりぢやないがね、君達はライスカレーは好きかね。」
乙「何いふんだ。そんな事無關係ぢやないか。」
丙「まあ聞けよ。ライスカレーは米とカレー粉を煮ただけでは大したうまいもんぢやないぜ。近頃の剃身カレーぢやぞとしなが、肉を入れて見ろ、豚でも牛でも」
甲「あつさうか。はいつた肉や玉葱や合はせ物の澤山ある方がうまい場合と、材料は最少でも渾然と美味無上といふのと、カレーライスにも色々あるわけだね。」

乙「早い話が吉澤氏の新著は舊關印のライスターフェルだね。一寸研究でござれ、隨想でござれと堅いものを澤山讀まされて、今度はまるで味の違つた關東周邊の山々木曾駒、北アルプス、そして廣島界隈の低い山々の報告迄と来る。讀書營養生理學、讀書衛生學上釣合と適量の問題で一寸どうかと思

ふ。」
甲「ところで序文と書き下ろし物は」

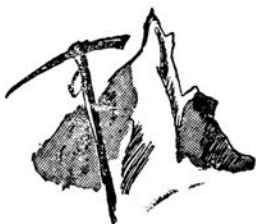
乙「新に稿を下ろしたものは「メルセデリオの初登頂」と「南方國の山々」との二つだけらしい。序文は君自身で讀んで見る事だな。著者の癖を氣にしないでね。眞の登山者とは云々の句はヤングの著書の序言にもあつたなど言はない事だね。日本の之からも益々勉強し實踐登山し自省してもらはなければならぬ指導者登山の姿を同情を以て凝視する事だね」

甲「や、色々どうもありがたう。いづれはこの對話も著者の耳目に觸れるだらう。僕からも宜しく言つとくつもりだ」(井口刀水)

北の山・南の山研究・隨筆・紀行
吉澤一郎著

昭和十七年十一月三省堂刊

(定價三圓八〇錢)



信通員會

アリユーシヤン通信

望月達夫

大部御沙汰いたしました。會の皆さん御元氣のことと存じます。もう數日でお正月が來ますがこの手紙が虎ノ門のルームに届く頃には昭和十八年ももう大部過ぎた頃かと存じます。アリユーシヤンで迎へる新年も又一寸生涯での良い思ひ出となることと思ひます
上陸以來〇ヶ月大部島の生活にもなれました、樹木の全くないツンドラ地帯のみの島、人間様が殆ど住んだ事のない所であり食糧や燃料になる様なものが全くとれないのですからこゝの生活も中々大變なものです、先づ住む家から心配しなければならぬのですから探検隊と變りはない譯です
氣温は驚く程暖く之がアリユーシヤンの十二月かと思ふ位です。東京より少し寒い位でせう。併し一二月の頃はまだ判りませんがこの分なら大して驚く事はないと思つてます。十二月に入つてから雪も降つて平地も眞白になりましたが其後雨降りて又ツンドラがすっかり出て了ひました。但し風は強いです

山は Mt. Kama — 鳴神富士が一番高くこゝからは眞正面に雄渾な姿を現はしてゐます。晴れた日

には前の小さな沼に影を落してきれてですね。一寸内地の仙之倉に似てゐます。もつと堂々としてゐるのは東方の海上に浮んでゐる。Soma島の山で岩場が多く頂は一寸ギザ／＼があつて甲斐駒に似た姿です。海の上にボカリと浮いてゐるのて變つた眺めです（或る地圖には Ohgaki と書いてありました）それよりも遠方には更に高い雪の山をもつた大きな島がみえます、アリューシヤンにも中々山が多い様です

動物は狐で之は所謂銀狐と言ふ奴だが野生のは余り美しいものではありません。又眞白なのもあますこの方が遙かに美しい感じがします。あとは大鷲（之は人間位）と雷鳥、白い海鳥、黒いウの様な鳥大鷲其他海猫など種類は多い様です

魚は鮭、鱒、鰻其他豊富にとれました。之等が唯一の御馳走です。此頃はシーズン・オフとみえて余り口にしません。海岸線は屈曲に富み峽灣が多く断崖が方々に見られます岬の沖には暗礁と飛び鳥があり、こんな風物は曾つて讀んだこの方面の探検記を思ひ出します

島の内部は二回程低い山を越えて少し歩きました、曾つての氷河を思はせる圈谷が諸處にみられますし瀧のいゝのも少しはあります

ハイキング程度の山歩きならいくらでもコースがみつかります。まだ道は全然ありません。内地の様子を出来るだけ御知らせ下さい。會の近況など知りたい所です

娛樂機關などまだ／＼全然なく雑誌などに餓えてゐます。會の印刷物（山岳、會報、山日記等）の到着を一番を長くしてゐる次第元氣故御安心下さい

本暮會長はじめ各位の御健勝を祈りつゝ

十二月二十六日 鳴神島にて

神宮行軍から
奥白根通信

橋本 三八

上京の節は大勢参りましてお多忙の處お邪魔しました。

神宮の行軍は雨でしたがコースが昨年と同じなので雨で却つて趣が變つてよかつた程です。

九州の野だどこを歩いてても、どの方向かには必ず山が立ちふさがつてゐるのですがこの相模の野は行けども行けども丘陵帯で、ちよつと變つてゐます、合羽をかぶつて巡禮のような氣持で大山街道を村から村と、ハツと氣が付くと小休止の號令であつたといふ風に大部隊ではありましたが歩くのは靜かでした。

この大部隊を岳聯の皆様の世話も大變であつたことゝ、お客様で参加した私は、九州ではいつも世話する側であるが何か濟まないやうな氣がしてなりませんでした

夜行軍になつてからは隊の行動になるだけ氣を付けて觀ました、それと言ふのは私達が指導する場合によく夜行軍になつて隊員が疲勞して來ると、妙に喧騒になつて一見狂氣じみてくる事さへあるのです、これは神經の疲勞かも知れませんが、又暗いといふことに黙つてゐられない人間の本能的のものが群衆心理で高潮するのかも知れませんが、一種の雰圍氣を醸し出すのです。

もう津田山へあと四軒ぐらひの頃からやはりそんな空氣が追つて來たのを感じました、喧騒になつて來ました、確に群衆心理です、何しろ一大隊五百人からのことですからいやに思ひました、しかし隊長は小休止ですぐ注意しましたので納りましたが、軍隊の夜行軍の場合でもこんな空氣は生ずるものだらうか、隊長はそれを知つて居られたのだらうか、それともこゝろした未訓練の隊だけの現象としてたゞ遺憾に思つて處置したのだらうか、隊長がその道の研究をしてゐる戸山學校の教官であるだけちよつと聽いて見たいと思ひました。

尤もこんな状態は極度の訓練を受けてゐるうちには無くなることかも知れませんが、大體に隊員の質の點でも昨年の方が最初であつた關係かよかつたやうに思ひました

後で隊員からも聽いのですが、大分考へ違ひの連中も居た様です。

私はこの行軍にはやはり地方の錬成會に参加した聯盟で登録済みの者を参加さすようにしたらと思ひます。競技の選士が豫選を通過する爲の努力と試験は、この行軍の選士にもあつていい、寧ろそれ以上の試験を経た者でなければいけないのではないと思ひます。

岳聯の方も考へて頂きたいと思ひます。

二日の神宮競技場に入場してから、恐れ多くも 聖上の行幸に接し、大君のお前、龍顔近く参列することの光榮を得たのは本年参加の幸運でありまして郷里にその光榮を土産とすることが出來ました

一晩寝ると翌日は計畫通りに東武鐵道六時發で四名だけ日光白根に向ひました、天氣は極上の明治節日和で、これなら夜になつても心配はあるまいと安心して行きました。

おそろしく面倒な乗換を繰返して湯本に着いたのは午後一時半で豫定より少し遅れましたので、一

刻を惜しむやうにしてすぐ山に向ひ、三時間半の後丁度五時、正し日没の時、雪の頂上に到達しました。一片の雲も止めない空は最後の陽光に映えて東の空には珍らしい五色の虹が棚引いてゐました、北アルプス槍の近くに没する眞赤な太陽が刻、刻、没する毎に光芒を放つのは何とも言へない靈妙なものを感じてたゞ打たれてゐました。富士も一きはぬきん出て殘光を受けた姿は地上のものとは感じられない幻のやうに、透明ではないかと思はるゝ程に神幻な姿でした。

附近の山が地肌のみであるのに、奥白根の一塊だけが銀白で、鳥居の附近ではスキーが出来るくらひ積つてゐました。

前白根に出てバツと眼前をふさいだいぶし銀の冠頭の印象、今もこの西僻の陋屋にもまさささと浮んで居る聖姿であります。

夜になつてからはずみ分冷えて來て、冷たい飯を吞み込んだ時は思はず震へりました。九州の連中には一足先に登山を味つた譯です。

ランタンの灯に導びかれて、それでも幾度か木の根に足を取られて八時半に湯本に降りて山の家泊めて貰ひました。夜中はまたずい分寒く、朝起きて部屋は寒暖

計を見ると零下二度で、外はひどい霜に樹々や草は霧氷が付いていました。バスで突切った戦場ヶ原の落葉松林も眞白な霧氷にガラスの浮刻を見るやうな美観で、紅緑に彩られた麓に戻つてみると、あまりの隔りある世界にしばらくは夢のやうな氣でゐました。

限られた時間内での山行なのですから天候でも悪かつたらおしまひですが、幸ひ天氣がよくて今年の神宮行軍の添物も主物に劣らない收獲で六日に九州に歸つて來ました。

奥別府の山々に對する二つの提稱

松岡 實

奥別府の山々とは從來雖然と由布、鶴見火山群と稱されてゐた地域に冠した名稱であつて其の區域は由布、鶴見を盟主とした南高崎山、西平家、カルト山、北立石山及び十文字原に亘る南北一六料、東西二〇料に及ぶ廣大な火山群である。私は現在まで何等地域的に考慮せられる事のなかつたこれ等の地區に對し左記の如く形體づけ呼稱する事を此處に提稱する。大方の御批判を仰げば僥倖である。

一、總稱

現在まで由布、鶴見火山群なる無

味乾燥的な名稱を冠せられてゐた此の一大火山群を今後「奥別府の山々」又は單に「奥別府」と總稱する事

二、區域 更に其區域を左記の如く四區域に大別すること

(1) 由布院を圍む山々

由布岳 (一五八三・五米)

雨乞山 (一〇七三・七米)

城ヶ岳 (一一六七・八米)

福萬山 (一二三五・九米)

カルト山 (一〇三二・五米)

平家山 (一〇二三・六米)

(2) 鶴見連峰

鶴見岳 (一三三四・五米)

内山 (一二七二・二米)

ガラン岳 (一〇四五・三米)

大平山 (七九二・二米)

高平山 (八五〇・〇米)

十文字原 (五〇〇米—六〇〇米)

(3) 塚原盆地

塚原盆地 (九〇〇米—六〇〇米)

(4) 小鹿火山帯

小鹿山 (七二七・六米)

志高湖 (五六〇・〇米)

高崎山 (六二八・四米)

由布川溪谷

(昭和十七年十一月三日)

對馬に來ました。嚴原の町は街

並や建物が、時往の儘に残つて居るのが楽しく、暇を見ては歩き廻つて居ります。

朝鮮で暮して居るので、特にかうした城下町が珍らしいのかも知れません。

町中には寛永四年と刻まれた空石積の防火壁や船着場跡が見られその昔の名残を止めて居ます。

二日、晝過から弟妹に連れられて、有明山へ登りました。見馴れない林相も面白く、落葉の散敷いた小道を登り頂上に達しました。

眼下には嚴原の港が緑青色の海を湛へて、小さな汽、帆船を浮べて居るのも美しく、街並を辿つて我家と思はれるのを探したりして遊びました。

こゝからは對馬全島が眺望され壹岐島を初め遠く朝鮮や本州の山影が薄曇色に煙つて居ました。

市場には材木の様な寒鰯や大鯛が並べられ、人々の取交す言葉も大半は聞取れないなど、島の風物はまだくわれくにとつて、物珍らしく楽しいものを覺えさせます。

四、五日頃京城へ歸る豫定で居ります。(十二月三十日)

蒙疆秋信

北田 正三

故郷の紅葉の色を夕陽の沙漠の

空に想ひ、胡風枯葉の波は一しほ淋しく地平線に消え行く。此處朔北の邊境に駒を立て、西城の山を遠く望む。果してアルタイを越えて、天山の水河を見る日は何時かと、夢醒めてユルトに想ふ。

蒙疆冬信

北田 正三

聖戰第二年を迎へんとする年の暮、遙かに胡風砂を卷き氷、風陰山を裂く地より會員各位の御健闘を祈る。陰山を南北に登行する五度、漸くシラミに解放されて一息入れ一本立て居り候。オンマニベミフン。

馬來より

清水 龍三

拜啓 暫く内地の山から遠ざかつて南方の空氣を吸ふことになりましたので當分の間御無沙汰します。ではその中南の山だよりをいたします。御期待下さい。

會員諸氏の御多幸を祈る 不一

上ノ原便り

高見 定吉

今年の正月も上越上ノ原スキー場の合宿で迎へました。久保の林造酒右衛門方てスキー合宿を始めから早いもので十年になります上ノ原スキー場は一時大いに宣傳され相當大勢の人が入る様になりましたが、この二三年はまた昔のま

様に靜かになりました。今年なぞ二三十人位しか來てゐませんでした。初心者が多いので今度は基本練習に終始しましたが眞白な寶川笠や武尊山を眺めてゐると登高慾が湧き上つて來てたまりませんでした。(一月九日)

神宮スキー

奥野 正亥

神宮スキーを視察に朝鮮から出來まして、一月三十一日光湯元に到着、競技を視て居ります。登行とスキーに就ては色々考へさせられますが競技と云つても軍隊の斤候競争等は大變參考になりました。今日は夜來の雪明けても止まず盛に降つて居ります。歸途富士山に寄つて行くつもりで居ります。(二月七日)

通化便り

湯淺 巖

皆様意義深い皇紀二六〇三年の新春を御健康に御迎へになられた事と思ひます。

そして今頃は豪快なスキーに或は氷雪の嶺々に御活躍の事と想像して居ります。私も其後益々元氣で軍務に精勵致して居り年末からこの通化に特別訓練に來て居ります。

御承知の通り滿鐵が大量に滿州第一或は東洋一と宣傳してゐるス

キーの通化です。私は滿州の他の外は知りませんがこの通化は素晴らしい處です。山の美しい眺、雄大なスロープ、設備の完備等、特に街の中心から周囲を眺めた風景は繪畫などに見るサンモリツツやシヤモニーを思はせます。頂上の峨々たる岩山に麓まで長く引いた廣大なスロープと麓の滿州獨得の煉瓦の建物この調和が私には大きな魅力となつて何時迄もこの風景の中から離れる事は出来ません。(一月九日夜)

北支から

山本雄一郎

寒入りて内地の冬山も一段と銀色に輝いてゐる事と思ひます。戦時下岳界も健全なる歩調を以て眞摯に御活躍の由同慶に存じます。今や南に北に岳人の活潑なる行動を約束せられる時會員諸兄の積年に亘る實踐と研究の應用時代が到來したわけです。赫々たる戦果と共に新しい天地への積極的御活躍を祈りかつ皆様の御健康を祈る。

登山一年

今川 良雄

戦捷の本年も悠々終止符をうつ頃になり益々御多端の事と思ひます。此の非常時局に在つても山へ行ける我々は幸福だと思ひます益々心身の鍛練に邁進致します。

本年山行のトータル、大體左の如くて至極月並的な山行ですが私の如き未熟者と致してこの位が關の山なのです。

一 月富士山(猛風)六合目より退却。

二 月富士山(二回共雪)五合五勾及二合八勾より退却

三 月富士山(晴)頂上往復

四 月富士山(同)同

七 月富士山、御殿場五合一寶永山一六宮五合一頂上御殿場、南ア、北保澤一聖一赤石一荒川、惡澤一二軒

十月、箱根、金時山一神山、駒

十一月、鳳凰三山廻り

十二月富士山(小雪)頂上往復

正月休暇は槍を計畫し幸ひ天候に恵まれ、頂上を踏みたいものと思ひます。(後略)(一七、二一、一八)

走りがき

土田 新一

外出を許されて家に歸りゆつくり娑婆の新聞を讀んで「登山道」が問題になつてゐるのに驚きました。寒稽古、武者修行をして練へた剣士が、町道場で師範から一律に稽古をつけられた者より意思、肉體が強靱なのは自明です。高峻主義が個人的自由主義的なりとして批判の対象となつてゐる様ですが、少くとも學校山岳部にとつて

は的はずれた議論だと思ひます。學生は指導者となる者です。ドイツの指導者教育が伸びやかな豊かな環境で行はれてゐるときいてゐます。

確固たる基底に立つた學校山岳部の生活を「してゐる者」「した者」は「行軍的登山」の訓練過程を経ずとも、肉體的には勿論理念の上でも「行軍登山」の指導者と爲り得るのです。逞しい個性が今の世に必要なものであるのではないでせうか。海軍士官としての激しい鍛錬を受けてゐる私は、何事に對しても精神的肉體的にびくともしない自信を植へつけてくれた學校山岳部の生活に感謝してゐます。學生山岳人が三千米の生活者としての光榮をあくまで追求し、見識を持たれることを希望します。(十七・十二・十四)

第二回有志懇談會

昭和十七年十一月二十九日の日曜の午後、第一回より集りは悪かつたが、再び昔懐かしい清水谷皆香園で有志懇談會が催された。今回は此の前の人々に加へて辻氏や佐藤女史も加はり、折良くも上京中だつた關西の別宮氏も走せつけられて和やかな山の懇談に終始した。此の日の中心話題の一つとなるべき豫定だつた尾關正二氏の「學生登山界の新しい問題に就て」

は急用で御本人缺席の爲割愛、沼井氏の「蛇尾谷頂談」だけであつた。五萬分の一地形圖原原、那須岳に跨る峽流大蛇尾、小蛇尾の登山記録約十(内七つは同氏の行、本號通信参照)を話の軸として種々此の山地の見聞を笑談的に話され、同行若永氏撮影の寫眞が廻覽された。此の話の前後、或は茨木氏の山岳書談、佐藤女史の安達太郎山輪カン登山談、辻氏のスフ服遭難一步手前的小論、近時登山裝備の困難や人夫難や、朝鮮臺灣の山行の話など交はされて、近來にない愉快な懇談會であつた。

午後二時頃から始まつて四時半頃終つたが、此の次は來春三月初めにでも開いて併せて時局相應な晩飯會にでもしたいと、一同の希望であつた。

當日出席者(順序不同)別宮貞俊、島山徳成、柴山登茂次、塚本繁松、辻莊一、茨木猪之吉、野口末延、吉田竹志、田邊主計、佐藤テル、高頭仁兵衛、(世話人)沼井鐵太郎、若永信雄(同)計十三名。席料各五十錢也申受く。

なほ此の催しに對し前回から以來基金として寄附された方々に厚く御禮申し上げます。(世話人)

冬季山岳研究講座報告

關西支部
既報、十七年六月開催せる夏季

山岳研究講座に引續き最初よりの計畫通り冬季山岳研究講座をも開催する事になり左記講座日程により、本會及大毎共催の下に開講した處、之亦熱心眞面目なる聴講者多數を得て、前講に優る好評に終了する事が出来たのは幸ひであつた。本講座も夏季同様、各講師の補筆を得た上、取組關西支部り出版の準備中であり、夏季の方は之が發表される頃には書店によ出てゐるであらう事を申添へてく。

尚、夏冬兩講座を通じて特に御盡力を賜つた會員石川欣一、西岡一雄兩氏に對し茲に厚く謝意を表したい。(富田記)

冬季山岳研究講座 日程表

十一月廿六日
スキー術の變遷 水野祥太郎
雪中露營 關根 吉郎
十一月廿七日
登山に於けるスキー術の變遷 津田 周二
水河地形の觀照 田中 薫
十一月廿八日
北と南 今西 錦司
登山用短スキーに就いて 角倉 太郎

外に三日間を通じて守本文生氏指導によるスキー準備體操を行つた。

會務報告

十二月常務役員會

十二月十八日午後六時於事務所
開催

出席者 島山、茨木、中司、早川
小原、兼松、富田、塚本

委任 小島外九名
議長 島山理事

一、(略)

一、支部編山岳研究講座刊行ノ件
關西支部編山岳研究講座(夏山)

ハ近ク朋文堂ヨリ刊行、印税其他
ノ處理ニ付支部ニテ十分考究ノ上

役員會ノ承認ヲ求ムルコトトス
一、入會申込者七名承認 以上

附記 評議員三田幸夫氏ハ南方出
向ノ爲辭任セラレタリ本會ハ深ク

ソノ勞ヲ謝ス

一月常務役員會

一月十日午後二時於事務所開催

出席者 嶺、武田、中司、早川、
冠、高頭、兼松、沼井、茨木、木

村、田邊、額田、塚本
委任 小島外八名

議長 嶺理事

議題

一、本會目的ニ關スル定款一部改
訂ノ件

右ハコノ際改訂ヲ行ハズ
一、入會申込者三名承認

二月常務役員會

二月十五日午後六時於事務所
開催

出席者 嶺、武田、高頭、島山、
木村、茨木、沼井、中司、金山、

小原、兼松、塚本
委任 木暮外十三名

議長 嶺理事

議題
一、當面ノ問題ニ就テ

用紙、印刷關係其他當面ノ問題ニ
就テ對策ヲ講ジタリ

一、補充役員ノ件
(イ) 改選ハ行ハザル事

(ロ) 評議員一名ノ缺員ハ次回評
議員會ニテ決定ノ事

(ハ) 幹事缺員補充ハ新ニ谷口現
吉氏、杉本義信氏ニ交渉ノ

事
一、山岳編輯ノ件

現在ノ編輯陣ニテ當分續ケ行ク事
一、小集會ノ件

東大ノ今冬期登攀、慶大ノ雪洞ノ
研究ニツキ交渉、三月一回開催ノ

事
一、テント比較研究ノ件

學生懇談會ニテ先ヅ研究ノ事
一、山岳年鑑刊行ノ件

大體實行スル事トシ次回ニ決定ノ
事

一、入會申込者六名承認
一、次回役員會 三月七日午後二
時

關西支部役員會

十二月二十四日 於喫茶ミュージ
ック

出席者 富田、西岡、木藤、小川
直木、栗飯原

一、冬期山岳講座の件 二十六日
より開講につき庶務報告

一、小集會の件 十二月十日宮武
辰夫氏よりアリユーション群

島方面の講演決定
一、一月度研究會 十二月役員會

にて決定の事
一、山岳講座出版の件 夏、冬期

開講の講座出版其後の經過に
つき富田氏より報告

十二月役員會

十二月十四日夕

於關西支部ルーム開催

出席者 中原、津田、富田、小川
西岡、木藤、栗飯原(直

木委任)
一、冬期山岳講座報告ノ件

一、研究會不定期開催ノ件
以上富田幹事ヨリ報告並ニ提案ア

リ承認ス
一、一月ニ會員懇談會開催ノ件

一、四月ニ會員大會開催ノ件
右二件決定ス

會員章再貸與

二二七六番 高木彦三(舊番號
二二五四番は無効)
二二九八號 中野周吉(舊番號
二二〇一五番は無効)

終身會員ニ變更

富田 健一(二六一五番)
森本 次男(二〇八八番)
西岡 一雄(二二二一番)
右昭和十七年度より終身會員ニ變
更

購入圖書

大塚彌之助著 岩波書店發行
山はどうして出来たか
中谷宇吉郎著 岩波書店發行
雷の話
三吉朋十著 旺文社發行
パラワン、セレベス、チモ
ル探検記
Sketches of Dauphine by
Bonney
スウェンヘディン著吉田一丈譯
西藏征旅記
南洋地理大系3、5、7、三冊

受贈圖書

黒田 米子著 日本短歌社
山々と婦人 右著者
ルドルフアスミス著小堀甚二譯
露領アジア踏査記 聖紀書房
右發行所
ゴルドン著田中一呂譯
世界ノ屋根 生活社
右發行所
眞鍋 健一著
日原を繞る山と谷 朋文堂
右著者
高橋 文太郎著
輪 日本常民文化研究所
右著者

望月勝海
佐藤晴生譯
リヒトホーフエン著

支那(1) 岩波書店
フォスコマライニ著
チベット 春鳥會
右二冊田邊主計氏

加納 一郎譯
北極圏と南極圏 朋文堂
右著者

川崎 隆章編
登山講座第一卷 山と溪谷社
右發行所

小野 幸著
奥秩父の山々 朋文堂
右著者

深田 久彌著
山頂山麓 青木書店
右發行所

澤 壽 次著
ゴビ沙漠探検記 目黒書店
右目黒四郎氏

チャムビオン著
ニューギニア探検記 旺文社
右發行所
ハイキングペンクラブ著
新しき山の旅 昭和書房
右發行所

Rock climbing in North Wales
by George and Ashley Abraham

服部 如實著
 山に祈る 平凡社
 右發行所
 吉澤 一郎著
 北の山南の山 三省堂
 右著者
 安齋 徹著
 樹 氷 岡倉書房
 右發行所
 妹尾 詔夫譯
 ニューギニア探検記 博文館
 右發行所

關西支部
 受贈及整備圖書報告

山岳征服（三木高嶺著）
 岩登り術・改訂版（水野祥太郎著）
 山野スキー術教本（水野祥太郎著）
 チロル傳說集（山上雷鳥著）
 山岳スキー術要諦（高橋健治著）
 以上 中原繁之助氏寄贈

雜誌「探検世界」（成功雜誌社刊）
 第一卷 貳號六號（明三十九年）
 第三卷 六號、第四卷 一、二、三、四、五、六號、第五卷三、五號
 第十卷 三號、第十一卷 三號
 （明四三・四）

以上 加納一郎氏寄贈
 Alpine Journal, 1933
 1936

1937
 1939
 Alden Zeitung, 1937
 登高行 一、二、四號
 リユックサクク 四、五、七號
 R.C.C. 三、四號
 立大山岳部々報 七、八、九號
 以上九冊第二回製合本分
圖書基金受贈
 一口 金五圓也 細川景正氏
 一口 金五圓也 田邊主計氏
會員消息
 日高信六郎氏 支那から伊太利
 大使に轉任赴任途上の氏は無事任
 地に到着
 田中蒼雄氏 陸軍少尉として應
 召中の處此程歸還
 木原均氏 學士院恩賜賞を授賞
 され
 齋藤直一氏 水戸裁判所長より
 司法省民事局長に轉任
 井上英夫氏 昨年北支戰線より
 歸還、今春三井物産濟南出張所に
 入社再渡支
 坂江善治氏 日本銀行熊本支店
 より本店に轉動
 小島久太氏 病氣全快後益々元
 氣となられた同氏は、四月六日風
 景協會主催の志賀剗川氏日本風景
 出版五十年記念講演會にて講演

を行つた

中屋健次氏（同盟通信社員）
海軍々務局囑託として大東亞戰
開始以來勤務中の同氏は今回應召
四月十五日入營

事務所より

御詫び三つ

一、山日記　年末迄に出來の豫
定のものが後れも後れたり四月に
入つてもまだ何日に發賣されると
も明確には申上げられない状態に
あります事は眞に恐縮の至りであ
ります。特に送金済の多數の豫約
の方々には申譯の言葉もありませ
ん。右は全く印刷方面手不足によ
るものであります。漸く校了とな
りましたから愈々近く發刊になら
ります。何卒今暫く御待ちの程を
御願ひ致します。

一、會報の事　百二十回の歸を
重ねた會報が、遂に慣例を破つて
一色刷となりました事は、直接其
衝に當つた當事者として心苦しい
限りでありました。何年前から間
題になつてゐた事ではありました
が、餘りにも見すばらしい出來榮
えの百二十號を眺めて、之ではひ
ど過ぎるといふ感を深めたのであ
りました。この號も止むを得ず前
號と似た體裁のものを御届け致し
ますが、次號からは今少し氣のき
いたものを御上げしたく努力して

居りますし見込もつきましたから何卒御諒承の程を願ひ上げます。

一 山岳 之も亦驚く程漫々的な印刷の進行振に開いた口がふさがらない位でありますが、今日の印刷界の實狀では餘り強い事も言へませんので只極力督促してゐる現狀であります。會員各位の御待兼ねの事は身にしてみてわかつてゐるのであります。中々はかどりません。しかし校正も可成り進みましたから來月は出來上ると存じます。御寛恕下さい。

山日記

◆山日記の發刊が後れましたので現在も尙當然賣員割引の豫約は受付けて居ります。そして發行後一ヶ月間續けますからどうぞその間に御注文下さい。しかし豫定分は殘部幾らもありませんから御入用の方は餘りゆつくりなさらないようにお願い致します。

◆豫約頒賃一冊に付 一圓三十錢（送料共）

◆本會振替口座 東京四八二九番

正誤

一一九號會報一〇頁昭和十六年度決算表中歳出合計一八四〇〇圓一四錢とあるは一八二〇〇圓一四錢の誤植に付訂正す

編輯後記

會報第一二〇號は一見何處の會報かと思はれるやうな體裁になりました。その上大へん發行がおくられてしまひました。それらの事情は同號に記載されてをりますが、何卒御諒承下さい。第一二一號も續いておりましたので一月、二月合號になりました。今三月號を組立てゝおります、いろいろ故障が起つて御期待に反するやうにな

り、焦燥を感じてをります。編輯後記といふものは大概辯解ではないかと言つた人がありますがそのうちお詫びをしなくてもよいものを書きたいと思ひます。會報の原稿をお待ちしてをります。なるべく一行十五字詰に御書き下さい。組立てるのに余程手間がはぶけますから。會報の一段は十五字、三十三行（四百九十五字）ですから一冊相當の分量があるわけです。（田邊主計）

昭和十八年四月十五日印刷納本
昭和十八年四月二十日發行
日本山岳會内
編輯者 田邊 主計
發行者 塚本 繁松
東京市芝區翠平町一（不二屋ビル）
發行所 社団法人日本山岳會
振替東京四八二九
會員番號三三〇三三
東京市芝區田村町六ノ六
印刷所 丸ノ内新聞社
（東京一〇八二）
配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町

山と溪谷社編・足立源一郎裝幀

登山講座

全岳界待望の巨篇B5判222頁・價各巻2圓20銭送15銭
全六巻13圓20銭既刊第一二三四巻・總目錄送呈

第五巻四月中旬刊行

天孫降臨と山岳崇拜
（丹羽牛洲）山の歌集
（川田順）野鳥詩集
（中西啓堂）山の叢書
（柳瀬正夢）山の動物
（大崎啓夫）山の鳥
（内田清之助）鳥居場
の鶴龜（中西啓堂）
高山嶽（河田寛）雷
鳥と岩魚（河野鶴藏）
雪溪に棲む微生物（岡
田喜一）東京から見え
る山々（木暮理太郎）
京阪から見える山々
（藤島玄治郎）山岳展
望（正井頑雄）山人の
通路（柳田國男）東北
方言語彙（金田一京助）
山と山の靈魂（早川孝
太郎）山の神祕説（倉
田一郎）閑憂細談（義
（橋浦泰雄）山小屋と
其設計（加藤誠平）山
村建築（石原憲治）山
民の小屋（金子綱平）

日本山岳寫真書・塚本閻治編

奥 日 光

清麗を極める傑作寫真と文に由る新案内書B6判160頁
アート刷・紙質地圖入り價2圓50銭送12

◇内容◇
原色版口繪 夏
の光澤沼（塚本
閻治筆）
雲間溪谷夏冬
華嚴溪谷、太郎
山、奥千手の秘
澤、奥白根山（
夏冬）、根名草
山、奥奥嶽温泉
郷、奥奥嶽温泉
金精峠、菅沼、
丸沼（夏冬）、
切込、刈込、山
王峠スキーツ
ア、三階澤、富
士見峠越え、日
光表達峠
記事 矢島市郎

既刊奥秩父・白馬岳・雪の上信濃境・價各1圓80銭送12

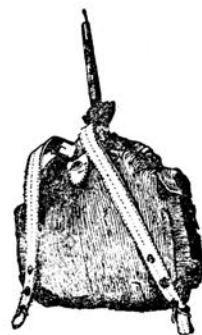
川崎章編『岳』序文・柳田 國男 原色版口繪 阿蘇山・故岡田 三郎助
名家寫真集 題詞・木暮理太郎 裝幀・正宗将三郎（五月下旬刊行）

東京市芝區田村町6-4 山と溪谷社 電話（芝）543番 振替（東京）60249番

キスリング型(E)式

ルックザック

御手元にある布地御持参になれば
御作り致します



山とスキー具専門

片桐テント登山具店

電話九段（33）三二一〇番
振替口座東京九二一八四番

東京市神田區神保町三ノ一（専修大學電停前）